

東遊雜記

十二

內閣文庫			
和	書	類	號
一	三	〇	三
七	一	〇	三
〇	三	〇	三
架	冊	號	類

和書門			
一	六	〇	二
二	六	〇	二
三	〇	九	二
一	〇	九	二
冊	架	函	號

內閣文庫	
番號	和 16602
冊數	13 ( 6 )
函號	177 1165



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



東遊雜記卷之十一

明治十三年購求

六三八二



值中右河原著

七座天休官ハ小繫ハ町ハ六丁川上  
小ハ河ハ於ハ小ハヤハ一ハのハ別ハ尚ハとハ神ハ宮ハ等ハ  
山ハ伏ハ等ハのハ社ハハハ相ハ列ハ中ハ一ハ以ハ四ハ地ハと

等ハのハ別ハ尚ハとハ神ハ宮ハ等ハとハ社ハハハ相ハ列ハ中ハ一ハ以ハ四ハ地ハと

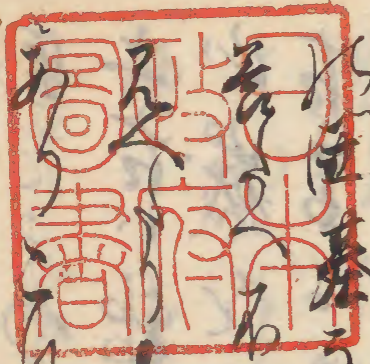
右ハのハ別ハ尚ハとハ神ハ宮ハ等ハとハ社ハハハ相ハ列ハ中ハ一ハ以ハ四ハ地ハと

右ハのハ別ハ尚ハとハ神ハ宮ハ等ハとハ社ハハハ相ハ列ハ中ハ一ハ以ハ四ハ地ハと

右ハのハ別ハ尚ハとハ神ハ宮ハ等ハとハ社ハハハ相ハ列ハ中ハ一ハ以ハ四ハ地ハと

右ハのハ別ハ尚ハとハ神ハ宮ハ等ハとハ社ハハハ相ハ列ハ中ハ一ハ以ハ四ハ地ハと

右ハのハ別ハ尚ハとハ神ハ宮ハ等ハとハ社ハハハ相ハ列ハ中ハ一ハ以ハ四ハ地ハと



雲とまわりし事し人如く傳へる事  
上古の神と稱せらるも墳をたつ或はハ  
山嶽とまわり或ハ海とまわりし事  
古書にありせり今ハ社名と異くし  
建立し寺院を以て祭りしむる佛  
法なりと神りし事之 昔ハ神を以て  
神作しありし事今ハ人  
合是世にありし物とありし事  
不思の法を伝せらるる事神宮に  
別當ありし事ありし事

風俗ありし事  
右ハ山ノ俗  
みてハ日也  
葉月乃其のけ  
いり未詳

新上揚より上人秋田と云古國ハ  
とりし事古ハ  
河ハ小瀬ありハ  
まて其も如や

おかしし申さるぬ小敷を以て東の地  
二三十万石を以て思ひし所敷ヶ所を  
廣大なるより再び狭くする也古人の如し  
百万石の所と古くより云傳ふるも  
之より比年比荒荒と成る指探り  
如帝範の如き目と云ふこと  
氏家乃よりふ川にさかすこと  
これくとも此所を以て事ありと  
徳子より大銀までお里の間  
新ぬ地揚武助と稱す豪家あり  
お造と

おてあつしくかぬ色地を以て  
稀なる家も有りやとおの  
此の言を以て石余を以て  
を以て地粟馬と申す  
大銀ハ久保田の事  
お多めて知り七千石と  
して二万石を以て  
計り大銀の町の上場より  
西にせり申す地  
此の産物地を以て

土人の檜田郡と云古一しうりなき名あり  
 ありし名を檜田郡何村〜と申す〜申すあり  
 大田形ありり〜を新あり〜さき〜は志  
 申す〜ありり〜は新新田郡檜田  
 郡と稱せり地とよ〜申すの一



玉作といはるる中なり東方南部界あり  
さして乃高山なり北方は流の界ハ  
高山ありびきあり其分の地理分明なり  
大館より久保田一街道筋を流るればハ  
三十二里平地の及なり人々水色乃風俗を  
辨しる所此方の好ふよりと農業ハ  
さして石田法めて活て地の利をとる乃  
心もろくく生色なり母して流より地の面  
積より自然なる水色を拓くや其思ひ違ひ  
多し衣服の法もさしてと屋宅のえらるるも

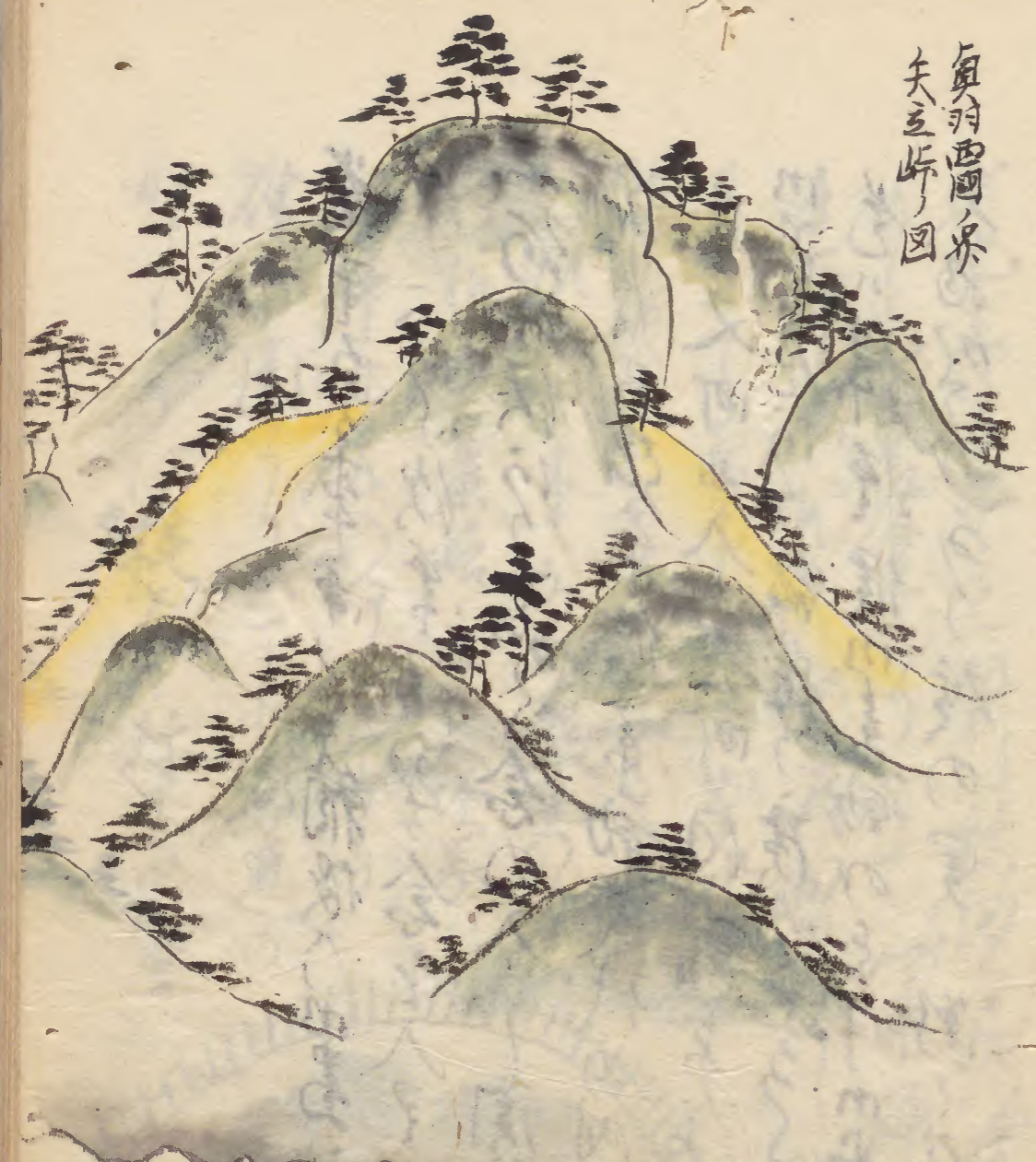
以て流るる乃流山なるまう六平生控ひるを  
其より海軍船もあつてこれの意して心と  
中し中なるもさハる所つてもあつて  
其より流るるより上方筋乃人相といふ  
界なる上古一乃風俗のこりてありしるも  
この一語判るあり其稲穂もさくも  
其より生さるるより中其常は稲よりさして  
長き稲よりか其有是は稲也と尋ね  
自然とがくのまくの稲毎年生しはと云ふ  
能く稲の相違する地と名を流るるなり

大鍬ハ古く大身なる土の古城跡にして其の地乃  
取の力やふいづる中然と云はる所なり  
也郡山と云はる人とも云はる所の人の田舎と  
して其の事も云はるなり一毎より大鍬ハ  
大鍬より一里余長本山といふ所なり  
中は竹印ありて是れと云はる地也其の  
所ハ山麓ありて食地ありて大鍬ハ  
長本山人と云はる所なり稀ありて一里余の  
地跡ありて自然と云はる所なり其の地也  
其の地も云はる所なり其の地也

落敷多生一ニ三すまわりの落敷ハ友く  
見つけし事也此をよりして中に居る事  
[子一]ト云十四日大鍬出立二里白は二里半  
自是列傳将度郡破の宮止宿けた  
見物ありき所一き道あり奥敷乃  
母ハ矢立と云はる所一山麓ありて  
頂よりかり下りて矢立乃松といふ大木あり  
竹削り

是ヨリ西北  
津經  
刻の如くの高一有  
矢立の松由然と云はる所一十余町下あり

真羽西園泉  
夫立峠の図



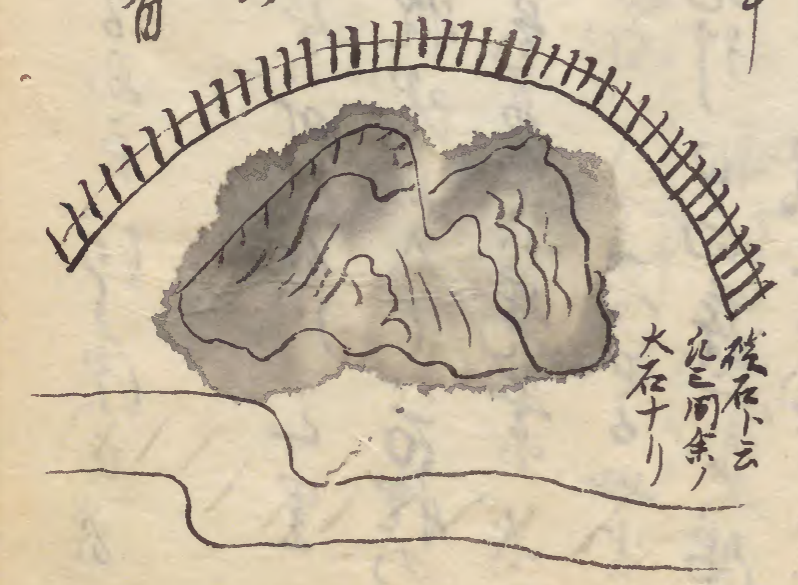
白沢より北へ二里  
九下西園ノ峠ニテ  
南ヨリ登坂登テ  
峻坦ニテテ往來  
ナリカ冬ニ積雪ニ  
候トハ箱根ニシテ  
登ルヤウニシテ  
有左右ノ大樹あり  
テ目カケテテノ所  
ナニテ人モ登テ  
行所又ナシテ  
ヨコメニシテ人々  
出テ下云流ナリ  
下リ坂元ヤ登リ  
坂道下下一里ヨ

昔新あり流年の人を改る新あり  
夫よりまゝに大余町ありて申の處あり  
ふらり神光の洞一を破の字あり  
入口より谷川を過板橋がら左右榎と  
松氏よりく谷川あり他平いれは  
新ありて武蔵がら



後をみる事申し箱根乃由事所拓の海  
 申にけり次を信り念を入りし處あり  
 此河のはけりてかく念の入りし周所ありやと  
 嘆しぬ弘前候より勅交代の時立寄り  
 と云又河舟入る可ほとゆ事は弘前候乃  
 由事所けり敏達より廣太をもちてし也  
 是ハ津浦候由事勅のより此處者ありと云  
 人物がうりあり碓の冥ハ漸く中同斗の

河也志る色ととも取列秋田色乃氏家より  
 けりし事念ありとして今申碓理の家申  
 事部乃ありり見及可ひしかと色御用  
 先母を申申申申申申申申申申申申  
 けりし事念あり  
 思ひし事あり魂まう  
 水垢子の藤略より是之塔墓ハ  
 事申ありはけりし事あり  
 碓の周より今申碓道の  
 かとらに碓石と稱する者



碓石云  
 此三同余ノ  
 大石ナリ

園乃如し如き況破り解るめを河原に在る  
披石とゆふのこみあり

十六日破り雲霧は三里二十余町石川之里  
山前山城下止宿奥列津波比み入て山程の  
家名も門長尾と見(が)是めては葉葉以  
かし葉葉系れ主所とみかくてあるもやせ  
只ふ事解り申あるも九列日向落戸大隅  
肥後の中とくくくく風土の於てハ  
秋田津波大ひみりー(が)家名も大か多  
まて家名衣服の河ーきさるゆハけ色大ひみ

河く竹園ハ葉は山を價をて下並  
今限る自由なるありけりて念物ハ鏡ハ  
河邊ハ事ハ是妙也ハ河原衣服屋宅ハ見若  
まハ夷風のこりてかしと恥さるの許あり  
うくく考て見れハあはるる事なり

大正十一年  
十月  
藤之川家史一編前



奥列平鹿郡津經  
岩城山ノ園

大山ニハアラス  
予思フ  
駿河重三  
粗似テ十分一



重三をいふことやいん  
ちのくの岩城の山乃  
音の河あまの  
源入る次まきん城口の派  
と有平洋多し和漢多



破石ノ有所ヨリ  
六里ノ間松原ヨリ  
平林ノ街道ナリ

岩城に岩城の嶽と云れど  
派んとけりまきん重三とと  
有平色元深はく

矢立峠より北二里に藏鍛村大鷲村と云者  
村並ひるりけ西村に温泉あり新河蔵  
鍛の湯ハある熱湯にて大鷲の湯ハぬる  
功徳法療ありと云入湯もろく人多く石川  
より弘前の城まで三里に街道ひろく  
りて左右の並本寺を築ひと方角ふと  
ありたりき道あり西乃くまは世ふんふ  
津村富士と称せり岩城山ありありて  
ゆるりゆるり新河街道此の並松弘前ありき  
岩城山乃種葉と云と云く山頂ありハ

白雲と帯せり如く眺をいふとある  
弘前ハ津原城中も後乃津城地にはある石  
市申三千余軒大櫓の町に城山成りて  
要害いふありんやと云く是くず家津町と  
由知江石相恋ありとの物語と武家の男女  
も後とかく由巡見使見物ありと云るよ  
人ハ武士小て人相衣服髪乃法やうまてと  
りかたさうと也

東遊雜記卷之十一終

東遊雜記卷之十二

傳一古河原著

山崎城の北にあり藤原の二里才八所  
又上頂の堂にあり其邊に後之里にあり  
雪のふりしといふもし第跡も活く  
雪のふりし山崎城の北にあり藤原の二里才八所  
奈神河原にあり之傳一古河原著  
此の北にあり山崎城の北にあり藤原の二里才八所  
其の南にあり藤原の北にあり藤原の二里才八所

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '山崎城' and '藤原'.



此之取上津軒産より伏見事より  
は度より事あり半如事は月より母存  
あまね人ありは子も母より事あり  
とてよ月より人物事は古より母存は産を  
し中より供養は事あり是は事あり  
高流は事あり大流より事あり  
是は事あり是は事あり永保年中は白河院  
は事あり頼義天子は安徳は頼朝  
及び貞徳宗は仁徳十年は信長は城

氏守の書より事あり  
傳一より事あり隆延之白余八朔重  
陽より事あり七日より事あり  
とて事あり事あり女人を禁割は事あり  
し事あり事あり女人は林より事あり  
心候より事あり婦人は事あり事あり  
女人は事あり神も佛も事あり事あり  
國を領する城を領する事あり事あり

むらん〜田〜よ女一人様初め心  
年一婦人〜〜〜建武のころ

世に風景は好む人南く多き申うも  
もる氣平う好む可なり〜異之を  
蘇列者多し日本之氣を擧げしは氣  
以て〜〜〜海合〜〜〜  
〜風景いそ〜〜〜舟旅杯のみ  
多婦人〜〜〜懐知海あり  
和〜〜〜懐月夜〜〜〜池の氣

〜〜〜糖〜〜〜  
〜〜〜一向宗の〜〜〜  
〜〜〜教多〜〜〜  
〜〜〜擧げ〜〜〜  
人〜〜〜山城〜〜〜  
も〜〜〜乃形  
〜〜〜白〜〜〜  
〜〜〜糖〜〜〜  
〜〜〜風〜〜〜  
〜〜〜



標め乃よりるもさるるにさるるの勝るも  
も可も所よりく好し可よりさるる世  
那りもさるるも人せよ初よりさるる  
羽別林田津野地  
と一丈もはさるる事さるる  
大雪とす  
比紙存界  
年一丈  
南北と相  
百余里北  
雪はくもよ  
解

心嶽  
有言  
家  
百姓  
麻布  
人  
也  
分





「高」〜「澄」〜「記」〜「行」

十七日 泚川 其之より 蟹田 たつた 年 籠

少者 泚川 其之より けいし〜 田畑の荒 不

唐太 成太 少也 句 又 事 少 此 身 使 少

少 才 使 之 少 少 年 少 前 比 年 少

早 霜 少 少 霜 作 少 少 振 米 一 粒 少

少 事 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少

少 事 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少

少 事 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少

少 事 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少

少 事 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少

少 事 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少

少 事 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少

少 事 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少

少 事 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少

少 事 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少

少 事 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少

少 事 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少

少 事 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少

少 事 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少

少 事 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少





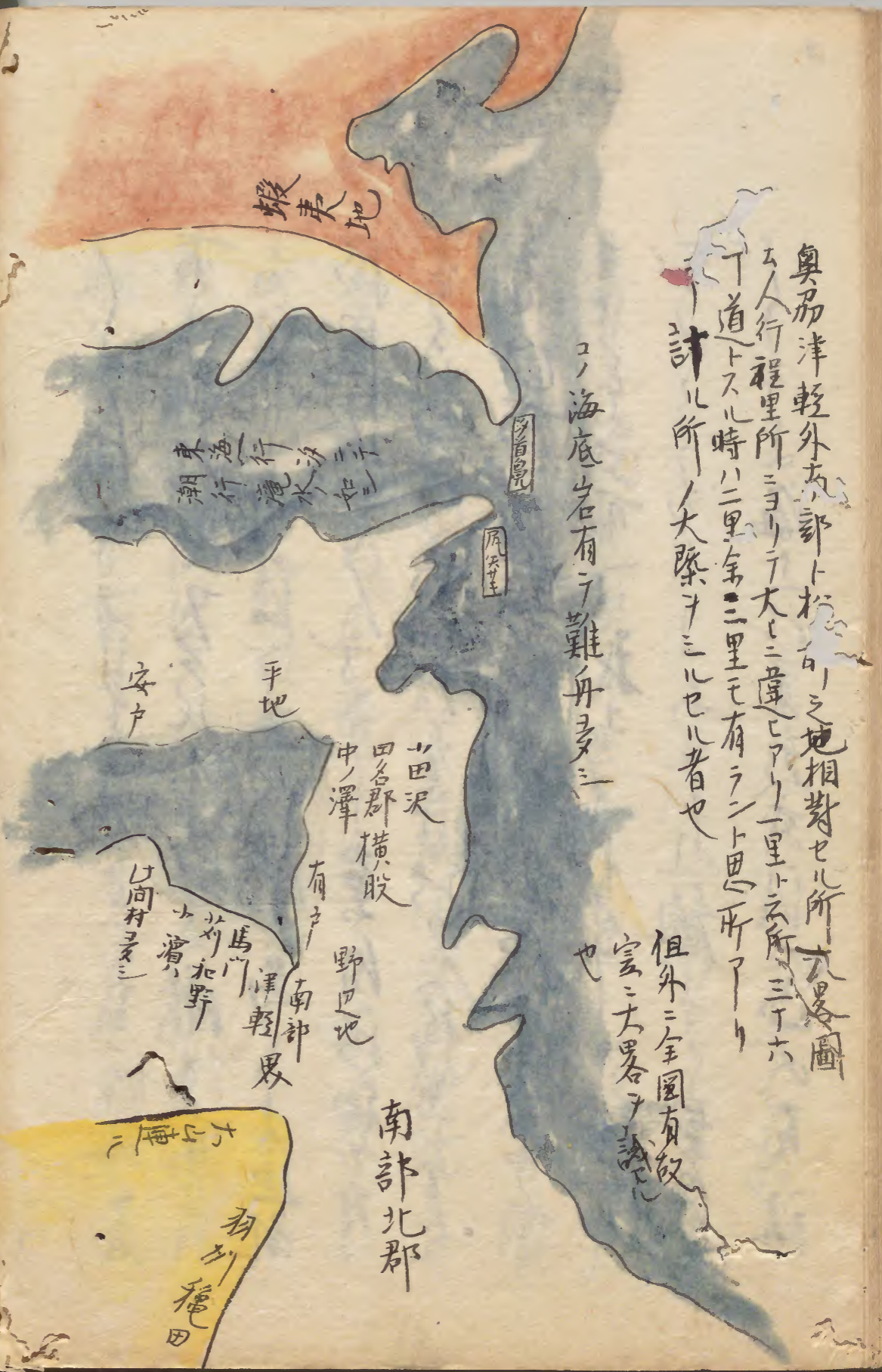
すは者年一々 是は之を云ふ事  
漢と日本と端々 和國日本との不  
りは本不用子方は此の村を支配  
するも度々群成せりて中々  
方中此は海に出入り簡に下る事  
若くは巡身事下向はる事二年も  
去れし事か今もしは方めす  
此等事人々 是事又事法歸者  
上御の御 相違事とも難事

信一 實と只者一と只事  
し事ハ風成り 此皆一桑月者  
名を極成無事なり 因成道  
しは事ありて事一 此は彼と  
漢也 此は異なり 大角と  
漢也 人々此事ともナリ  
之は漢分人々事きり 凡そ  
是方一抱もり 是事一桑月  
此事一 形を馬と 此事一









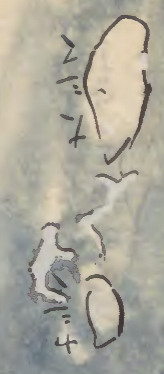
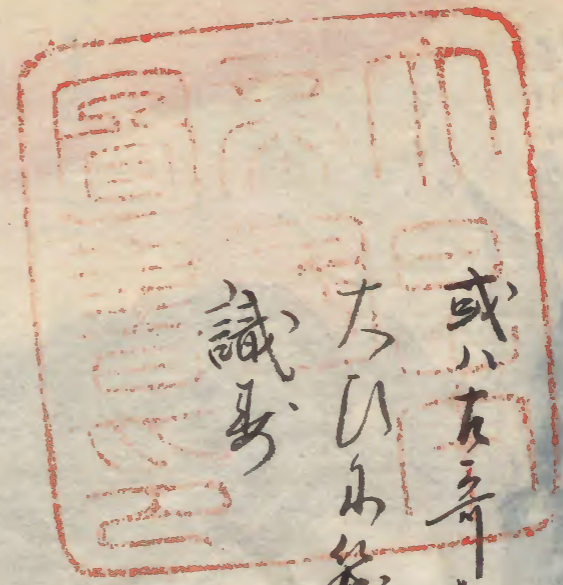
奥加津輕外海部ト相対シ之地相對セル所ニ是圖  
 云人行程里所ニヨリテ大ニ二里ニ違ヒアリ一里ト云所ニ三下六  
 下道トスル時ハ二里余ニ三里モ有ラント思所アリ  
 計ル所ノ大際ヲニルセル者也

コノ海底名有テ難舟多クニ

但外ニ全圖有故  
 宜ニ大畧ヲ計ル  
 也

東遊雜記卷之十三 畢

或ハ右奇ナシトハ身ヲ一ト何ク〜人々  
方ハ小笑ハ一事〜是ハ次ハ卷ヲ  
識



天津

十二元

